

中国仏教と現代社会

——太虚・印順を中心として紹介

魏 道儒

菅野博史 訳

人間仏教（訳者注——中国語の「人間」は、日本語の人間という意味ではなく、人の住む場所を意味する。つまり、世間、現実社会などを意味する。そこで、日本語の人間と区別するために、「にんげん」と呼ばずに、「ジンカン」と呼ぶ場合が多い）の運動は二十世紀の初期に始まり、二十世紀の八〇年代以後になると、すでに兩岸三地（中国、香港、台湾）において、宗派の境界線を超越し、地区の区別を超越する仏教の中心的な潮流に発展した。⁽¹⁾ 仏教界にしろ、学术界にしろ、また宗教の管理部門にしろ、中国仏教の現状と未来の発展を論じる場合、人間仏教というテーマ

を回避することはできない。新世紀の中国仏教の建設を追求するのに、人間仏教という基本的観点を離れることはできない。人間仏教の運動は、依然として旺盛な活力を保持しているだけでなく、ほとんど中国近現代の仏教の代名詞となった。⁽²⁾ 本論は、太虚（一八九〇—一九四七）、印順（一九〇六—二〇〇五）の思想と実践を中心として、人間仏教の興起の原因、性質、特徴の簡単な分析を通じて、現代社会の発展変化に対する中国仏教の適応について、いくつかの見方を論じよう。

第1節 人間仏教の興起の原因

二十世紀の初年、清王朝の滅亡は、中国政治史上の新しい時代を創始した。中華のきわめて多数の優秀な子女は民族を救い、中国を振興する壮大な気概を抱いた。そして、蹂躪され、抑圧を受け、貧しく後れた運命を変えるために、勇敢に前進し、血みどろになって奮戦するなかで、中国の思想界が民主と科学を尊ぶこともまたしだいに主流となつていった。このような情勢のもとで、仏教は総体的に言えば、まだ大きな面目の一新は行なわれず、その発展の立ち後れははつきりとしていた。

当時の仏教界の志士は、仏教の現状のためにみな心を痛め頭を悩ました。まさしくこのような情況のもとで、社会的な変化に適応するために、民国の初年、人間仏教の運動は開始されたのである。

印順法師の結論に基づけば、当時、二つの重要な現象があった。第一に、民国初年以來、仏教の僧俗は、社会の変化に適応するために、各種の慈善、教育事業

等に従事することを始めた。彼は指摘している。「民国以來、仏教の法師、居士は、みな社会に適応する感覚を持ち、慈善、教育事業等をなし、結果のいかんを問わず、ただ確かにこの面——仏教は現実の社会にあること——を認識し、賛成した⁽³⁾」と。第二に、「人間仏教」の思潮はしだいに興り、ますます影響力を持つようになった。印順は指摘している。「人間仏教の論題は、民国以來、しだいに提起されてきた。民国二十三年（一九三四）、『海潮音』は人間仏教の特集号を出し、当時、ひろく多くの人の同情を得た。後に、慈航法師は星洲で、『人間仏教』という仏教の刊行物を始めた。抗日戦争の期間、浙江省・雲県も小型の『人間仏教月刊』を出し、前年には、法舂法師はタイで、『人間仏教』と題する講演をした⁽⁴⁾」と。

この二つの現象から、初期の段階の「人間仏教」はけっしてただ出家僧侶の事だけではなく、僧俗の幅広い参加があったことがわかる。人間仏教はひとたび開始されるや、ただ純粹な理論面の學術的研究のみではなく、仏教がいかに社会の発展に適応するかという理論

と実践の二重の探求を行なう性質を持ったのである。人間仏教の誕生と発展は、まさしく中国社会の歴史の大きな変化が宗教界に反映したものであり、仏教が古代社会から現代社会へ転換した産物であり、中国の現代仏教が前進した重要な標識の一つである。民国初年に、このような仏教界が慈善、教育等の事業、及び初步的な理論研究を創始したのは、中国近現代の仏教が社会変化に適応した最初の表現形式であり、人間仏教運動のひな形であると言うことができる。

第2節 人間仏教の本質

人間仏教については、その理論と実践との二重の探求の面において、重要な貢献をなした人物が多い。⁽⁵⁾前世紀の中葉になって、太虚と印順の理論と実践とは最も代表的であり、かつ新世紀の中国仏教の現代化の建設に重要な啓発的な意義を持っている。

太虚は最も早く「人生仏教」を使用し、また「人間仏教」をも使用した。太虚はこの二つの概念のうち、人生仏教をより重視して、彼の思想全体を概括した。⁽⁶⁾この二

つの異なる概念を使用し、多少は異なる思想傾向を反映したけれども、太虚が仏教の改善運動を提唱し、現代仏教を確立するという全体的な目標から見ると、どちらの概念を使用しても、けっして本質的な差別はなかった。太虚の人生仏教の理論と実践は、人間仏教の運動全体の第一段階であると言うことができる。

太虚の提唱した人生仏教の最も顕著な特色は、実践を目標としたものであり、ただ理論研究を目的としたものではないということである。彼は新しい観点を提出することや新しい対策を推進することによって満足せず、真理と時機に合致するという原則の指導のもとで、過去の仏教の優秀な遺産を選択して継承し、仏教の全面的な変革を進め、仏教を中国社会、ないし世界の潮流に適応させ、中国仏教の現代化を確立することを求めた。これが彼の人生仏教の原則であり、またその理論の特色でもあった。彼は指摘している。

今日、すべてのブッダの真理によつて全世界の人類の時機に適応する必要がある、さらに以前の各時代、各地域の仏教のエッセンスを選択して、

これを総合し整理するので、「人生仏教」という言葉ができた。⁽⁷⁾

それゆえ、人生仏教とは、すべての仏法を総合して時機に適応させた仏教を意味する。⁽⁸⁾

太虚は、「人生仏教」を仏教に対する全面的な改革を実現する旗印としたが、人生仏教の思想の内容はきわめて豊かであり、仏教の建設の各方面に関係している。総じて、彼は、仏教思想(教理)、僧団の組織(教制)、寺院経済(教産)の「三大革命」を核心とすることを提唱した。

彼は指摘している。

仏教の教理には、現段階の思潮に適合する新しい形態があるべきであり、固定的な処方箋にとらわれて変化する病気を治療することはできない。第二に、仏教の組織、とくに僧制については、変えるべきである。第三に、仏教の寺院財産については、十方の僧衆の公用―十方僧物としなければならず、剃髪の師による派閥、法系による派閥が遺産を継承する私的所有、独占の悪習を打破し、

有徳の長老を供養し、青年僧侶の人材を育成し、仏教のさまざまな教務に役立てるように創立しなければならぬ。⁽⁹⁾

この「三大革命」に対して、印順法師は高い評価を与え、多くの研究者も太虚の改革施策の多くがまったく新機軸を打ち出したものであることを認めた。太虚法師は、人生仏教を提唱した日から、仏教の現状に対する分析と批判、仏教の遺産に対する発掘と選別、仏教の未来の全体的な構想と設計、これらを重視した。

太虚法師から見ると、彼が提唱した「人生仏教」の運動は、一つの仏教の「革命」運動であった。彼は人生仏教の運動を、「仏教改善運動」(たとえば彼の『私の仏教改善運動簡史』『我的仏教改進運動略史』)と呼び、ひいては「革命」(たとえば太虚の「三大革命」と呼んだ。したがって、人生仏教の本質は、仏教が社会変化に適応し、時代に即して発展変化する仏教の革命運動なのである。これもまた前世紀の初めに開始され、新世紀に入っても依然として発展の最中にある人間仏教運動の本質である。

第3節 印順の人間仏教の思想の特色

印順が提唱した「人間仏教」の理論は、太虚の人生仏教を継承した基礎の上に形成されたもので、その理論形態から言うと、さらに成熟し、完成されたものである。印順の人間仏教思想を総合的に見ると、次のような三つの顕著な特色がある。

第一に、仏教が社会に適応することの重要性を鮮明に強調している。彼から見ると、民国初年以來、人間仏教と関連する実践と理論の研究の過程は、仏教が社会に適応する過程であつた。それゆえ、彼の人間仏教の理論のなかでは、社会の発展に適応することが強調された。社会に適応するとはどのようなことか、仏教はどのように社会に適応するか等の問題について、印順法師は専門的に論述した。彼は、社会に適応することとは伝統仏教に固有の資質であることを認める。仏教が社会に適応する過程は、仏教が世間と人間を利益する働きを発揮する過程でもあり、⁽¹¹⁾ 仏法の本質を探究し、純正の仏法を把握する過程でもあり、⁽¹²⁾ また仏教が自己変

革と自己浄化を実現する過程でもある。人間仏教の「思想、制度、風格は、いずれもたえず変化する過程にある」⁽¹³⁾のである。

彼から見ると、たとえブッダが説いた法や立てた制度であつても、適応性がなければならず、社会の変化とともに変化するものでもある。⁽¹⁴⁾ 經典の記録する仏法のなかには、世界中どこにでも適用できる抽象的なドグマはけつしてない。この主張は、人間仏教の実践のために開いを取り除いてくれる。印順の仏教の社会適応性に関する論述のなから、彼の「人間仏教」思想の開放性を見て取ることができる。

第二に、仏法の全体を研究するなから、仏教の最も貴い精神資源を発掘し利用している。彼は『阿含經』を人間仏教の經典の根拠とし、初期聖典の教義を人間仏教の理論的基礎とし、釈迦牟尼を「人間仏教」を实践するモデルとし、かつ仏教全体の研究のなから、人間仏教が当然備えるべき思想のエッセンスを詳しく解き明かす。⁽¹⁵⁾ それゆえ、彼の人間仏教の思想は理論の体系性と徹底性を備えている。

人間仏教の思想の起源の問題に関しては、ここ数年、多くの学者の関心を引き起こし、多くの見解が発表された。ある人は中国の禪宗に起源があると言い、ある人は大乘仏教に起源があると言い、ある人はその思想のエッセンスはブッダ在世の初期仏教のなかではなく

まれたと言い、ある人は清代の仏教に起源があると言う。⁽¹⁶⁾さまざまな思考はきつと、すべて人々を啓発して人間仏教と伝統仏教に対する認識を広げることができるであろう。なぜならば、人間仏教の理論と実践のなかにおいて、確かに異なる時代の仏教の多くの要素が含まれているからである。ただし、印順法師の観点は、ますます大きくなる影響力を持っているようである。⁽¹⁷⁾

第三に、「人間を根本とする」という原則を確立し、人間を尊重する思维方法と価値観を、人間仏教の理論の全体に一貫させている。人のためにし、人に依拠し、人を形作ることは、彼の人間仏教の理論の精髓となった。人間を根本とすることを、真正の仏法であるかどうかを評価する基準とし、仏教全体を判別する標準とすることは、ただ衆生を大切にするという仏教の固有

の伝統に対する創造的な継承だけでなく、その思想に強烈な批判精神を持たせた。

中国の伝統文化のなかにしろ、伝統仏教の教義のなかにしろ、「人間を根本とする」という豊かな思想があることを指摘するべきである。しかし、印順のような「人間を根本とする」という観念を論述し強調することは、古代の伝統思想に対する発展と言わざるをえない。総じて、印順の提唱した「人間を根本とする」ことには、次のような五つの重要な内容がある。

(一)太虚の「人生仏教」を改善するために、「人間を根本とする」ことを強調すること、これもまた印順が「人生仏教」に代わって「人間仏教」を用いた重要な原因である。まさしく彼自身が繰り返し述べたように、彼の「人間仏教」の理論は、多くの面で太虚大師の影響を受け、同時にまた多くの面で新機軸を打ち出した。「人間を根本とする」ことを最優先に強調する面においては、まさしくこのようであった。

太虚は「人生仏教」を提唱するとき、また「現実の人生を重視する」べきであると強調した。しかしながら、な

ぜさらに人生仏教の代わりに「人間仏教」を用いる必要があるのであらうか。印順は、人生仏教が対治の面において、死と亡霊を信仰し重視することを是正するとに重点を置いたと考えた。「人間仏教」はこの一面を対治するばかりでなく、「同時にまた神と永生に偏ることを対治した。真正の仏教は現実社会にあるものであり、ただ現実社会の仏教だけが、はじめて仏法の真義を表わすことができるのである」。「人生仏教」は「現実の人生を重視する」ことを強調するので、本質的に言った。仏教の根本趣旨からけつして逸脱することはない。しかし、人間仏教が人生仏教をいっそう補充し改善したことは、主に「人間を根本とする」思想を強調することによってであり、つまりさらに仏法の「真意義」を解き明かすことによってである。印順長老は指摘している。

世俗化と神格化は、仏法の繁栄をもたらすことではない。中国仏教は、一般にもつばら死と亡霊を重んずる。太虚大師はとくに「人生仏教」を提示して対治した。しかしながら、仏法は人間を根本としており、ま

た神格化すべきではない。亡霊の教えでもなく、神の教えでもなく、亡霊化でもなく神格化でもない人間仏教こそはじめて仏法の真意義を解き明かすことができる。⁽¹⁹⁾

仏教を繁栄させるために、「人間を根本とする」という原則を堅持する必要がある。人間仏教を提唱する目的は、人のためにほかならない。

(二) 仏教の異なる法門を結合して、「人間を根本とする」ことを論述する。印順は、いかなる仏教の法門を修行しても、人の本分を尽くすことを基礎とすべきであり、人に依拠すべきであると考えた。「人間仏教」を確立することは、仏教のその他の法門を修行することをけつして排斥するものではない。印順は、印光法師の例を列挙して、次のように指摘した。印光は一生涯、念仏往生の法門を極力宣揚したが、彼には「仏教が現実社会にある重要な意義を軽視することはない、印光は、「人の本分を尽くすことを、西方に往生することを求める基礎とした」⁽²⁰⁾のである。つまり、仏教のどのような法門を修行しても、人に依拠し、人を尊重することを基礎

とすることがあり、「人間仏教」の精神をすべての仏教の修行法門のなかに貫徹させる必要があるのである。

(三) 仏法のエッセンスを詳しく述べるという角度から「人間を根本とする」ことを詳しく解説し、「人間を根本とする」かどうかを基準として、仏教全体を判別、評価する。印順は指摘している。「インドの後期の仏教は、仏教の真義を破棄し、人間を根本とせず、無を根本とし（初めは一神の傾向の梵天を重んじ、後には汎神的傾向の帝釈天を重んじた）、仏法に異常な変化をあたえた⁽²¹⁾」と。印順から見ると、「人間を根本とする」思想からはずれたことは、また「仏教の真義を破棄した」ことでもある。「人間を根本とする」かどうか、印順が仏法の真義を判定する試金石となったのである。

(四) 修行の全過程の面から「人間を根本とする」ことを強調する。仏果に趣く修行過程は、人間のためであり、人間に奉仕する過程にはかならない。印順は太虚の思想を継承し、人乗の教えから仏果に趣くことを強調する。つまり、人は菩薩行を修行することによって成仏するのである。どのように仏果に趣くのか。印順は指

摘している。「おしなべて自分のためを考えず、他者を利益する慈悲心を持つて衆生を利益することが、とりもなおさず菩薩行を実践して仏果に趣くことである⁽²²⁾」と。したがって、個人が仏果を成就することは、ただ人間のためにし、人間に奉仕する過程のなかでだけ、はじめて実現することができるのである。

(五) 修道の理想を樹立する面から、「人間を根本とする」ことを強調する。成仏の過程とその実現は、人を浄化し、人を形作る過程にはかならず、いわゆる「人格の最高の完成」である。印順は、現実社会において成仏する過程は、正しい人間となることから始まって、円満に菩薩行を修習することによって、成仏の目的を達成することであると考えた。いわゆる「成仏は、人の本性の浄化と進展であり、人格の最高の完成である⁽²³⁾」。印順は仏教全体を研究することから「人間仏教」を詳しく述べ宣揚し、また仏教全体を研究することから「人間仏教」の理想を探究し実現した。印順は指摘している。「仏法全体のなかから仏法の徳行を理解し、人生の和諧、福楽、清浄を理想とし、基準とする⁽²⁴⁾」と。印順が「人間仏教」を

提唱した究極的な目的は、人間のためにすることであり、彼は人間を尊重する思维方法と価値基準を「人間仏教」の理論の隅々にまで一貫させた。言うまでもなく、これは衆生を大切にする仏教のすぐれた伝統に対する創造的な発展である。

第4節 人間仏教の思想の啓発

太虚と印順は、いずれも仏教の時代テーマを把握するように勤めるなかでその思想を醸成し、深く仏教の精神の本質を発掘し利用した。その基礎のうえに、その中核的な内容を取り出し、社会と適合する発展のなかで、その理論を充実させ改善した。彼らが確立した人間仏教の重要な理念、重要な原則は、長期にわたって海峡兩岸の仏教界の指導者によって継承、宣揚されてきた。⁽²⁵⁾ 彼らの理論と実践とは、新世紀の中国の仏教の建設に対して啓発する重要な働きがあった。

第一に、仏教の実際的情況に合わせて、的確に仏教を振興するプランを提出し、仏教を改善する対策を打ち出した。

太虚は「人生仏教」の理論を提出し、三大「革命」を提唱し、当時の仏教界に存在する問題と結びつけて提出したが、的外れや勝手に空想したものではけっしてなかった。印順が「人間仏教」の理論を豊かにし改善したことは、仏教に存在する問題をしっかりと把握して解決するなかで進められた。まさしく印順が説いたように、「人生仏教」は、「もっぱら死と亡霊を重んずる」現象を是正するためであり、人間仏教はさらに天界を重んじ神を重んずる現象を是正し、仏教を世俗化もせず、神格化もしないようにした。

現在の仏教はすでに二十世紀初中期の仏教とは同じではない。新世紀には、中国は良好な政治、経済、思想、文化の環境に置かれ、重要な発展のチャンスを目の前にして、社会主義社会の発展に適応するという新しい使命を担っている。同時にまた、新世紀の中国仏教を建設する過程のなかで、新しい社会の現実には直面し、以前には経験したことのない問題を解決し、新しい挑戦に直面する必要があることを、認識すべきである。仏教と社会との協調発展のなかでぶつかった問題をど

のように解決するかは、仏教の健全な発展に直接影響を与える。それゆえ、新世紀の中国仏教を建設するには、はじめにまた現在の仏教の状況を深く調査、研究することから出発して、仏教発展の時代テーマを正確に把握し、重点的に解決しなければならない現実の問題を鋭く捉え、的確に改善のプランを提出すべきである。

第二に、人間仏教の運動の性質と歴史的意義を深く認識する。

太虚は、仏教を振興する自分の実践を「改善運動」と呼び、「革命」運動と呼んだ。これは仏教を振興する重要性、新仏教を建設する困難を認識したものである。このような認識は、我々が人間仏教の運動全体を認識することにとって、重要な啓発的な働きを持っている。

「人間仏教」は、仏教の全面的な革新運動であるので、純理論的な問題や純学術的な問題ではなく、いくつかの新しい観点をただ提出するだけで解決することのできる事ではない。仏教が自己変革を実現する運動であり、仏教が社会の現代化に適応して変化する過程である以上、これは長期にわたる困難な歴史の過程で

あり、理論と実践の二重の探求を含み、社会の各方面の参加があつてはじめて実現するものであることを意味している。

今日、人間仏教が関連する学術界のホットな話題となったことは、偶然的現象ではけつしてなく、仏教が社会の変化に直面し、挑戦を受け、チャンスをつえ、時代に即して発展変化することを実現する過程において必然的に出現した現象である。人間仏教の運動の本質は、ある程度、困難性、長期性、そして挫折、逆行を避けることができないという性格を持っていた。しかし、仏教は新世紀に特殊な、取り替えのきかない歴史的使命を持っている。したがって、長期的に見ると、宗派の境界線を超越し、地区の区別を超越する「人間仏教」の運動は、必ず健全な発展を遂げ、無限の前途を持ち、新世紀に多くの面で世間と人々を利益する社会的役割を発揮し、仏教史上に光り輝く新たな一章を創作するだろう。

第三に、仏教が社会に適応する重要性を重んじ、仏教と現代社会との協調的な発展を実現する。

人間仏教の提唱者たちは、ほとんどみな異なる角度から社会に適応する重要性を強調している。新世紀の仏教の建設は、自己閉塞的な状態では進めることができず、かならず社会を理解する基礎のうえに社会に適応しなければならぬ。印順法師の関連する論述は、「社会に適応する」ことに対する人々のさらなる認識を啓発することができる。

印順の見方によれば、仏教が「社会に適応する」ことは、けっして社会の「低級な趣味」に迎合するものではなく、社会を「化導」するためのものである。したがって、仏教が社会に適応する過程は、仏教が自己変革を実現する過程でもあり、世間と人々を利益する社会的役割を発揮する過程でもある。仏教が社会に適応すること自体から言えば、能動と受動、積極と消極の区別はけっして存在しない。これらの区別は、仏教がいかんして社会に適応するかを議論する面においてのみはじめて意義がある。もし我々がこのように仏教の社会への適応の問題を認識するならば、仏教自身の発展の将来性と社会の発展進歩とを意識的に関連させることができる。

きる。仏教の歴史から見ると、仏教が社会に適応することもまた仏教自体の備える資質である。

第四に、継承と革新とを結合させる。貴重な批判精神は、仏教のすぐれた遺産を創造的に継承することによって役立つ。

太虚と印順とが人生仏教、人間仏教の理論と実践を提唱するなから、彼らはどちらも継承と革新とを有機的に結合させることを重んじ、仏教全体を研究するなから仏教の精神的な資源を発掘し利用したことを見ることが出来る。彼らは仏教全体に対して分析批判を行ない、どれを継承すべきか、どれを放棄すべきかをはっきり区別した。緊密に社会の現実と関連させ、創造的に仏教のすぐれた伝統を継承した。

新世紀に、仏教は新しい情勢に直面している。仏教思想の発展、仏教自身のさまざまな面における変革は、いずれも継承と革新とを結合させるべきである。とくに変革を追求する過程において、太虚法師、印順法師の貴重な批判精神は宣揚する価値がある。これもまた新世紀の中国仏教を建設するなかにおいて欠くことの

できない精神である。

注

(1) 二十世紀の八〇年代以前には、大陸の仏教界の指導的人物たちはまだ明確に「人間仏教」の理念を提出しなかったけれども、大陸の仏教は社会変革に適応し、仏教と社会主義社会との相互適応の面で、大きな成果を挙げた。

(2) 近年、仏教教団内部と外部の学者には「人間仏教」という名称についてすでに異なる見方があり、他の名称を「人間仏教」の代わりに用いることができるのか、あるいは「人間仏教」を別の名称のなかに包含することができることを主張する。たとえば筆者の見たものには、「人本仏教」「衆生」「中道仏教」などがある。本論は、「人間仏教」を、中国仏教が現代社会の変化に適応する歴史として取り扱う。

(3) 印順「仏は現実の社会にあり——人間仏教緒言」〔仏在人間 人間仏教緒言〕（訳注—タイトルは必要に応じて、日本語訳と原題を記す。日本語訳と原題が同じ場合もあるが、原題が異なる場合は、日本語訳の後に、原題を「」のなかに記す）18頁。本論に引用する印順法師の著作は、ほとんど『妙雲集』（正聞出版社、一九九八年一月版）に基づく。以下、タイトルと頁数のみを記す。

(4) 『人間仏教緒言』17頁。

(5) この十数年、人間仏教の代表人物に対する中国の学术界の研究はますます深化し、切り開いた範囲はますます拡大となり、専門の論文、ひいては専門の著作が詳細に研究した人物には、太虚、大醒、法舂、東初、印順、巨贊、正果、趙樸初、星雲、証嚴、聖嚴、覺光等がいる。また一部の学者の研究の範囲はさらに広く、現代に影響のある法師を、すべて人間仏教を考察する視野のなかに入れた。

(6) まさしく印順が、「太虚大師は民国十四、五年に人生仏教を提唱し、さらに抗日戦争の期間に、専門書『人生仏教』を編集した。大師は、人間仏教は人生仏教のすぐれた意義に及ばないと考えた」と述べるのとおりである。『人間仏教緒言』19頁を参照。

(7) 太虚『人生仏教開題』（『太虚大師全書・五乘共学』218頁。本論に引用する太虚の著作は、すべて『太虚大師全書』（善導寺仏経流通处、一九九八年四月第四版）に基づく。以下、タイトルと頁数のみを記す。

(8) 太虚「人心を改善する大乘仏教」〔改善人心理的大乘仏教〕（『太虚大師全書・学行』222頁）。

(9) 太虚「私の仏教改善運動簡史」〔我的仏教改進運動略史〕。

(10) 「大師の三種の革命、つまり思想、制度、経済をすべて重んずることは、実によく仏教革新のすべてのテーマを把握している。何とすぐれた智慧であろうか」（印順『太虚法師年譜』）。

(11) 「仏は現実社会にあり―人間仏教要略」〔仏在人間・人間仏教要略〕112頁。

(12) 「心を法海に遊ばせること六十年」〔游心法海六十年〕〔華雨集〕第五冊、19頁。「真理と時機にかなう人間

仏教」〔契理契機の人間佛教〕〔華雨集〕第四冊、2頁。

(13) 「説一切有部を主とする論書と論師の研究・自序」〔説一切有部為主的論書と論師の研究・自序〕。

(14) 「仏は現実社会にあり―人間仏教要略」112頁。

(15) 「真理と時機にかなう人間仏教」〔華雨集〕第四冊、3頁、33頁。

(16) 以上の観点は基本的に、印順法師が否定したものである。「仏は現実社会にあり―人間仏教要略」の関連箇所を参照。

(17) 人間仏教の思想はブッダに由来するという観点は、ますます多くの仏教界の学者から支持されている。

(18) 印順法師は、「人間仏教」を宣伝することは、当然、太虚大師の影響を受けたものであるが、いささか異なる点もある」と指摘している。「真理と時機にかなう人間仏教」58頁を参照。

(19) 印順「説一切有部を主とする論書と論師の研究・自序」。

(20) 印順「仏は現実社会にあり―人間仏教緒言」18頁。

(21) 印順「人間仏教緒言」22頁。

(22) 印順「人間仏教要略」112頁。

(23) 印順「人間仏教三宝観」73頁。

(24) 印順「仏法概論」182頁。

(25) 兩岸三地の著名な仏教の指導者のなかで、このような

観点を発表した人は多い。たとえば、星雲法師は、「六十年以上、私が推進した仏教は、仏法と生活とが融合して不二となった人間仏教である」〔人間仏教論文集〕下冊、324頁、香港文化事業有限公司、二〇〇八年三月版）と指摘している。

(ぎ どうじゅ／中国社会科学院世界宗教研究所研究員)
(かんの ひろし／創価大学教授)